

## 民数記を学ぶ (4)

塩野和夫

### 第7章 平和の行進 民数記20章14節～21章3節

#### 1 約束の地取得をめぐって

##### (1) 荒野の旅路から約束の地取得へ

荒野の旅に備えて民数記の1部(1～10章)ではイスラエルが共同体として整えられていくことを描いていた。

2部(11章～20章13節)は40年に及ぶ荒野の旅そのものを描く。共同体として整えられながらも次々と困難を経験した厳しい旅であった。その中でイスラエルは自らの限界・高慢・不信仰を知らされる。幾度となく深刻な危機を迎えながらも、神の憐みによって救われた。このような経験を重ねることによってイスラエルは神の民へと成長していく。

荒野の旅を40年経験して迎えたのが約束の地の取得である。イスラエルは40年の後に約束されていた土地を取得する。民数記3部(20章14節～36章)はその準備と東ヨルダンの取得を扱っている。

##### (2) 約束の地取得をめぐって

私たちは約束の地取得をめぐって、判然としない思いを持っている。確かにそこは約束の地であった。イスラエルの立場からすると約束の成就を信じて歩んできた土地である。そして、40年の月日の後に約束の地がついに与えられる。それはイスラエルにとって大きな喜びであったに違いない。

しかしながら、判然としないのはカナン人がすでにその地に住んでいたからである。未開の土地を与えられたわけではない。土地の取得とはすでにカナン

人が住んでいる所を奪い取り、新たな支配者となることであった。いくら神の命令とはいえ、そのようなことが許されてよいのか。

正直なところ、このような疑問を持たざるを得ない。そこで、率直な疑問を持ったまま聖書における約束の地取得とはどういうことなのかを学びたい。

### (3) 民数記3部の構成

民数記3部「土地取得の準備と開始」(20章14節～36章13節)の構成を見よう。

#### 1 エドム通過の拒否 20章14～21節

約束の地に入るためにエドムを通過することを拒否される。そこでイスラエルはエドムを避けて平和的に約束の地を目指す。

#### 2 アロンの死 20章22～29節

アロンの死とエレアザルへの引継ぎである。アロンの死は人間の限界とそれを越えた神の業を描いている。

#### 3 ホルマでの勝利 21章1～3節

ホルマにおけるイスラエルの勝利である。

#### 4 青銅の蛇 21章4～9節

つぶやいた民が青銅の蛇を仰ぎ見て救われた。

#### 5 宿営の地 21章10～20節

旅路における宿営の地を記している。17～18節に記されている井戸の歌が有名である。

- 6 東ヨルダンでの最初の勝利 21章21～35節  
東ヨルダンにおけるイスラエルの勝利である。
- 7 バラム物語 22章～24章  
バラムの物語である。祝福の民が他の人々からどのように見られていたのかを記している。
- 8 モアブの異教礼拝を行う 25章1～18節  
イスラエルがモアブの異教礼拝を行うという過ちを犯した。
- 9 第2回目の人口調査 25章19節～26章  
第2回目の人口調査である。
- 10 娘たちの嗣業権 27章1～11節  
娘たちの嗣業権について記している。
- 11 モーセへの死の通告 27章12～23節  
モーセに死の通告がなされる。アロンの場合と類似している。
- 12 祭儀の規定 28章～30章1節  
祭儀の規定について記している。
- 13 女性の誓願について 30章2～17節  
女性の誓願について記している。
- 14 ミディアン人への勝利 31章  
ミディアン人への勝利を記している。

15 東ヨルダンの土地分与 32章

ルベン・ガド・マナセの半部族に東ヨルダンの土地が分与される。

16 出エジプト以来の宿营地 33章1～49節

出エジプト以来、イスラエルが宿営した土地を記している。

17 西ヨルダンの土地分割の指示 33章50節～34章29節

西ヨルダンの土地分割に関する指示を記している。

18 レビ人の町と逃れの町 35章

レビ人の町と逃れの町の規定である。

19 女子相続者の結婚について 36章

女子相続者の結婚について記している。

## 2 平和の行進

民数記3部は土地取得の準備と東ヨルダン地方の土地取得について記しているが、かなり雑多である。それでも、「1 エドム通過の拒否」から「3 ホルマでの勝利」で基本的な見方と実際を学ぶことができる。そこで、1～3をまず学びたい。

### (1) 平和の行進 20章14～21節

イスラエルの行進がどのようなものであったのかを、「1 エドム通過の拒否」(20章14～21節)は記している。それは戦いを望むのではなく、謙遜で礼儀正しく統率の取れた行進であった。



平和の行進

#### ア イスラエルの申し出

カデシュはエドムの端にある町で、イスラエルはカデシュからエドムを通ってカナンの地に入ることができた。目標の地はエドムの向こうにあるからである。そこで、兄弟の民族としてイスラエルはエドムに重ねて通行の許可を申し出た。エドムの町の中心には王の大路と呼ばれる道があった。馬車の通ることのできる道だったと言われている。

#### イ エドムの拒否

イスラエルの申し出をエドムは冷たく厳しく断る。学者たちによると当時のエドムは王国として栄えていた。しかし、エドムはイスラエルに対して決して暖かい態度を示さず、むしろ疑いと厳しい拒絶の返答をした。

その上、エドムは多くの軍隊をイスラエルに差し向けてきた。

#### ウ エドムを避けて

一つの可能性としてイスラエルにはエドムとの戦いを受けて立つことがあった。向こうから仕掛けられた戦いだったからである。

しかし、戦いを回避してイスラエルはカデシュを退去する。しかも、さらに南まで退去してエドムの領地を回ってカナンの地に入る道を選んでいる。それははるかな道であった。しかし、南周りの道をイスラエルは黙々と進んでいった。

この道のりはイスラエルが平和を尊重する民であった事実を語っている。

#### (2) アロンの死 20章22～29節

次いで、20章22～29節に記されているのがアロンの死である。

アロンはモーセと並ぶイスラエルの指導者であった。彼はモーセの兄であったが、モーセを立てて民の側に身を置き厳しい荒野の旅を導いた。ところが、そのアロンが約束の地に入ることはできない。

アロンの死はどんな人間であっても神に用いられるところにその人の分があると語っている。

#### ア 主の語りかけ

カデシュからエドムを回ってホル山に着いた時である。なお、ホル山の位置は分からない。

主がモーセとアロンに語りかけられた。「アロンは先祖の列に加えられる。わたしがイスラエルの人々に与える土地に、彼は入ることができない」(24節前半)。それゆえに、ホル山に登ってその子エルアザルに祭司の務めを継がせなさいと語りかけられる。

#### イ アロンの死

そこで、モーセとアロン、それにエルアザルは主の語られた通りにホル山に登っていく。そして、アロンの服をエルアザルに着せる。それは祭司の職務がアロンからエルアザルに移ったことを語っている。

そして、アロンは死んだ。

## ウ 民の悲しみ

イスラエルの全会衆はアロンの死を知り悲しみ泣いた。アロンは民の側に立つ指導者であった。人々のアロンに対する信頼は深かった。そのような信頼があったからこそ、荒野の40年の旅は成り立った。アロンには重大な罪もある。それでも彼はモーセと並ぶ神の指導者で、民の信頼する掛け替えのない人物だった。

アロンはカナンに入る前に亡くなった。人々は彼のために泣いた時、何を見たのか。それは神がアロンを立てて導かれた真実である。アロンは神の業のために大切な働きを担っていた。その務めが今エルアザルに引き継がれた。

### (3) ホルマ 21章1～3節

「ホルマ」とは「絶滅」という意味である。2節にある「絶滅させます」の原語は「すべてを神に捧げる」を意味する。つまり、ホルマでの出来事は勝ち負けが問題ではなく、イスラエルの神に対する態度を示した出来事であった。

## ア アラド王の攻撃

事の起こりはアラドの王がイスラエルを攻撃し、数名を捕虜として捕らえた事件にある。この事件をめぐるイスラエルは主に誓いを立て、「この民をわたしの手に渡してくださるならば、必ず彼らの町を絶滅させます」と言った。

イスラエルがエドムに対して示した態度は平和の行進だった。あの時も戦争の危機があった。しかし、イスラエルは戦いではなく遠回りの行進をした。今回も向こうから仕掛けられた戦いである。しかも、すでに攻撃を受け数名が囚われの身となっている。その時にイスラエルは戦うことを決意する。それはアラド王の非道に対する戦いということができる。

「絶滅させます」とは「神に捧げる」を意味する。悪の町を滅ぼし、神に捧げるというのである。

## イ ホルマ

イスラエルはアラデの町を攻めてことごとく滅ぼした。そして、廃墟となった街に「ホルマ」(絶滅)という名前を付けた。

ホルマという名称は何を語っているのか。滅ぼされた悲惨なのか。滅ぼされなければならなかった罪なのか。それとも滅ぼされた人々の悲しみか。

いずれにしても「ホルマ」(絶滅)は約束の地取得における一つの現実を語っている。

## 3 主の民の行進

民数記3部最初の3セクションから学んだ。これらから約束の地取得に関する基本的な特色を読み取ることができる。まとめておきたい。

### (1) 結束した謙遜の民

まず、約束の地に向かうイスラエルは決して戦いを望んでいたわけではない。確かに徹底した戦いを彼らは何度か経験している。しかし、基本的にイスラエルは結束した謙虚な民であった。エドムに対する態度にこの特色は現れている。

この特色は主の民として徹底した訓練を受けたところから来ていたと考えられる。

### (2) 神に導かれる — アロンの死 —

次いで、約束の地取得に先立ってアロンの死が描かれていた。その際に、「アロンはわたしがイスラエルの人々に与えた土地に入ることができない」と語られている。

アロンの死から学ばなければならない。それはどんな優れた指導者も死に、私たちの支えから失われていく現実である。出エジプトの出来事には指導者が必要であった。教会にも折々にふさわしい指導者が必要とされる。しかし、彼らもまた神から召され、神の仕事に用いられていた事実を忘れてはならない。



約束の地取得の前にアロンが召された事実は民にとってどれほどか悲しい出来事となった。しかし、主の業としてはそれが相応しかった。アロンは召された役割を果たせば、それで十分だったからである。

### (3) ホルマ — 主に捧げる —

エドムと全く異なるケースとして登場したのがホルマである。

イスラエルは謙遜な民であったが、彼らの謙虚さは主に対する態度を根本とした。だから、「主に捧げることが相応しい」と判断すれば、彼らは毅然として戦いに臨んだ。そして、主に捧げるために完全に滅ぼしつくした。それは当時の戦いの通常の在り方だった。ただし、これに対して私たちが納得できないで疑問を持ち続けても当然だと考えられる。それでも、イスラエルの人々が主に捧げる態度をもって、徹底して悪を滅ぼした事実からは学ばなければならない。

悪に対する毅然とした態度を取るのはむつかしいからである。

### (4) 滅びの町

滅ぼされたホルマの町の立場に立つと言えるかもしれない。そこには大きな悲慘があり悲しみがあった。イスラエルに対する憎しみがあり、恨みもあった。

しかし、悪を犯した場合にはイスラエルも同様の怒りを受け、多くの人々が滅ぼされてきた。つまり、滅びはホルマだけのことでなく、イスラエルも同様であった。罪に対する裁きに関しては私たちが同じ厳しさの前に立たなければならない。

したがって、ホルマの町の立場に立って見つめるべきは裁きの厳しさであり、誰もその前から逃れることはできない。

#### 4 覚えましょう

- (13) アロンは先祖の列に加えられる。わたしがイスラエルの人々に与える土地に、彼は入ることができない。 民数記20章

約束の地の取得にあたってアロンの死が告げられた。彼は40年間の荒野の旅を導いてきた指導者である。そんな彼がなぜ約束の地に入れないのか。しかし、それでいいのである。イスラエルを導くのは神であって、アロンは神に仕えていた。アロンの死においてこの真実が明らかにされる。人は与えられた務めを果たせばそれでよいのである。

- (14) その名をホルマ（絶滅）と呼んだ。 民数記21章

ホルマとは絶滅という意味である。イスラエルの土地取得にあたっていくつかの町が滅ぼされた。そこに私たちは矛盾を感じる。しかし、ホルマに立つ時に町の絶滅は人々の罪の結果であることが分かる。そうだとすれば、ホルマは私たちに対する警告に違いない。

### 第8章 バラム物語 23章27節～24章9節

#### 1 もう一つの立場

- (1) もう一つの立場

聖書を学ぶ際に主の祝福の普遍性という特質が重要である。それぞれの町や国には独自の文化があり、歴史があり、個性がある。それらは民族の独自性を生んでいる。しかし個々の独自性を超えた普遍性がある。主の祝福は独自性を超えた普遍性をもたらしている。

これまでイスラエルの歴史を学んできた。神はエジプトにおける圧制からイスラエルを救出し、カナンの地へと導かれた。その過程でイスラエルは主の民として整えられていく。そこには祝福の基とされる内実があった。この目的の

ため、イスラエルは神の民とされ、約束の地も与えられようとしていた。

しかし、バラム物語はもう一つの立場から語っている。イスラエルを迎え入れた側からである。その民族にも独自の文化があり、歴史があり、国がある。その立場から見てイスラエルとは誰なのか。彼らにとってイスラエルは凶暴な侵略者でしかないのではないか。

バラム物語はイスラエルを迎える立場からイスラエルの侵入について語っている。

## (2) 王バラクの不安

ここに登場してくるのがモアブの王バラクである。

バラクはイスラエルが多くを率いてやってきたのを見ていた。彼らが先にホルマで勝利し、アモリ人の王シホンに対しても勝利したのを見ていた。それでバラクは不安を感じた。ホルマやシホンのように自分たちもイスラエルに滅ぼされてしまうのではないかと不安を感じた。

しかし、イスラエルに対する不安はバラクだけのものではなかった。モアブの長老たちも国や文化が滅ぼされてしまうのではないかと不安を感じていた。

## (3) バラクとバラム

そこで、バラクは一計を考えた。力でイスラエルに対抗するのは困難なので、バラムを招くことにした。バラムは呪術師である。呪術によってイスラエルの脅威を取り去ろうと考えたのである。

こうしてバラム物語の二人の主人公バラクとバラムが登場する。モアブの王バラクは政治的権力者としてイスラエルに不安を感じていた。それに対して、バラムは呪術師としてイスラエルに立ち向かっていこうとしていた。

## (4) バラム物語の主題

バラム物語の主題は明らかである。バラム物語はイスラエルを迎える側に立場を置いている。彼らはイスラエルに脅威を感じ、何としてでもその侵略を阻止したいと考えていた。

そこで呪術師バラムを連れてきてイスラエルの脅威を取り去ろうとした。ここにバラムとイスラエルの神との出会いが起こる。バラムは神と出会うと、次第に変えられていく。ついにはイスラエルが祝福の基であることを語るようになった。

ここにいたって、神の祝福という普遍性はイスラエルという枠を超えてバラムにも及んでいる。

## 2 バラム物語の構成

そこでバラム物語全体の構成を見ておく。その上で、第3の託宣（23章27節～24章9節）を学ぶ。

### (1) バラク、バラムを招く

#### 1) 第1回目の招き 22章1～14節

イスラエルがモアブまでやってきた時にモアブの王バラクは不安を感じた。そこではるかメソポタミヤから呪術師バラムを招こうとする。バラムの呪術を受けた者は呪われると考えられていたからである。ところが、バラムは招きに応じようとはしない。

#### 2) 第2回目の招き 22章15～20節

バラクはさらに多くの家来を送ってバラムを招く。すると、今度はバラムが招きに応じた。聖書は神が「行くがよい」と言われたからだとしている。

#### 3) バラムとロバの物語 22章21～35節

ところが、バラムが旅立つと神は怒られる。「行くがよい」と言った神がなぜ怒られたのか。バラムが富に心を奪われたからだとする学者もあるが、理由は不明である。その時にロバがバラムを助け、しかも言葉を語るという出来事が起こった。

(2) バラクとバラムの会見 22章36～40節

モアブの国までやってきたバラムをバラクが迎える。バラクは王として丁重にバラムを歓待した。そこにはイスラエルを呪ってほしいという期待がある。

(3) バラムの託宣

1) 第1の託宣 22章41節～23章12節

バラムはまずバモト・バアルの山に登って主の言葉を聞く。その時にバラムは呪術を行ったと考えられる。ところが呪術師のバラムに主の言葉が臨む。そこで、バラムは主から聞いた通りに語る。(7～10節)

2) 第2の託宣 23章13～26節

面白くないのはバラクである。場所を変えれば呪ってくれるかもしれないと考え、場所を変えるようにと伝える。そこで、ピスガの頂に連れて行き、呪いの言葉を期待した。ところが、バラムはやはりイスラエルを祝福する。(18～24節)

3) 第3の託宣 23章27節～24章9節

それでもなお諦めることなくバラクはベオルの頂に連れて行く。この箇所は丁寧学ぶ。

4) 第4の託宣 24章10～19節

怒るバラクに対してバラムは第4の託宣を語る。それはイスラエルの勝利を明快に語るものであった。

5) その他の託宣 24章20～25節

さらにバラムはイスラエルの勝利を語る。(20～25節) その後に自分の国へと帰っていった。



ろばとバラム

### 3 目を閉じた人の言葉

バラム物語の全体を概観した上で、第3の託宣を学ぶ。この箇所はバラム物語の中でも最も古い記録と見られている。

#### (1) 場所の移動 23章27～30節

すでに2度バラムがイスラエルを祝福するのを聞いていた。そこでバラクは場所を移動する。場所を変えればバラムはイスラエルを呪うかもしれない、そうすればイスラエルに勝利できると考えたからである。何としてでもイスラエルに打ち勝たなければならないという執着心が動機である。

#### (2) 目を閉じた人の言葉 24章1～4節

しかし、バラムはバラクとは違っていた。当初はバラムも呪術を行ってイスラエルを呪っている。ところが、彼は主がイスラエルを祝福されるのを繰り返し聞いた。そこで、もはや呪術を用いてイスラエルを呪おうとはしない。すると、主の霊がバラムに臨んだ。そこでバラムは語り始める。

ベオルの子バラムの言葉

目の澄んだ者の言葉

「目の澄んだ」とは「心の目を開く」と同じ意味である。肉眼で判断するのではなく、心の目を神に向かって開いて判断しようとする。そういうバラムの態度を語っている。続けて記されている。

神の仰せを聞き

全能者のお与えになった幻を見る者

倒れ伏し目の開かれている者の言葉。

バラムはもはやただ神の言葉を聞く者である。「倒れ伏し」とは祈りの中で恍惚状態に陥っている者だと言われる。ここにはバラムがもはや呪術者ではなく、預言者の存在に近づいていることが分かる。

### (3) 主が植えられた木 24章5～6節

主の言葉を聞くバラムは重ねてイスラエルを祝福する。しかし、その祝福の言葉は単なるイスラエルへの讃美ではなく、「主が植えられたアロエの木のように」という。

つまり、イスラエル対モアブではない。イスラエルもモアブも超えた存在があつて、その神がイスラエルを祝福している。そうであれば、民族間の対立を越えて共に認めなければならない祝福である。

### (4) 祝福の言葉 24章7～9節

バラムは続けて神の祝福の歴史を語り始める。イスラエルはアガグよりも栄え、彼らはエジプトから導き出された。それはイスラエルが祝福された歴史である。そのように語った後に、バラムは結んでいる。

あなたを祝福する者は祝福され、

あなたを呪う者は呪われる。

それはかつてアブラハムが旅立ちに臨んで神から聞いた言葉である。同じ言葉が逆の立場に置かれていたバラムによって語られていることに意味がある。

#### 4 伝道の根拠

##### (1) 主の民に立ち向かう

学びをまとめておく。まず、「主の民に立ち向かう」現実である。

イスラエルからするならば、神から選ばれ祝福の基とされていた。だから、神が示された通りに歩いていけばよい。しかし、事情は単純ではない。国も歴史も文化も違った人たちがいて、彼らがイスラエルに立ち向かってくる。それは否定されるべきではない。

私たちの国もそうであった。キリスト教が入ってきた時に私たちの国はキリスト教を激しく排撃した。自分たちの歴史があり、宗教があったからである。したがって、かつての攻撃はただちに非難されるべきではない。

けれども、そのような攻撃を承知の上で、福音は全ての人に宣べ伝えられる側面がある。

##### (2) 不安

イスラエルを迎えたモアブの王バラクは不安を感じた。自分たちの国はどうなるのだろうかという不安である。この不安はキリストを迎えた時のエルサレムの不安に似ている。

この不安は単なる心配ではなく、本物に対する不安である。失いたくない何かを持っている者は真実の前に立たされると不安を感じる。真実の前に自らの姿があからさまにされるからである。

だから、この不安はまだ真実に立っていないことも語っている。もし真実に立っているならば、イスラエルは決して攻めてはこない。ただ、祝福をもたらそうとするだけである。だから、何の不安も感じることはない。



### (3) 祝福の可能性

バラクに対してバラムの反応は対照的であった。バラムは呪術師で本来は神から遠い存在であった。

ところが、イスラエルを前にしてバラムは神の祝福の現実に出会う。呪術に頼るよりも目を澄ませて神の言葉に聞く確かさを知る。こうして、バラムは呪術師から預言者にも近い存在へと変えられていった。

そこで、バラムは「わたしの終わりは、彼らと同じようでありたい」と語る。神の福福のうちに生涯を閉じる者でありたいと願うからである。

ここに神の祝福が民族の壁を超えている現実を見ることができる。

### (4) 伝道の根拠

バラムの変化に伝道の根拠、可能性を見ることができる。

神の福音には民族の壁を超えた普遍性がある。その人の過去や宗教、様々な事情を超えて神の福音は全ての人に臨み、救いを与えようとしている。ここに伝道の根拠がある。

ただし、向こうの立場を認め、尊重し、その前提に立って、福音を宣べ伝えるべく必要がある。ここに伝道の可能性がある。

## 5 覚えましょう

### (15) わたしの終わりは彼らと同じようでありたい。 民数記23章

バラムは呪術師で福音からは最も遠い存在であった。しかしだからこそ、主の民との出会いを通して鮮やかに福音の現実を知ることができた。その時に語った「わたしの終わりは彼らと同じようでありたい」から、神への信仰を見ることができる。